氏　　名　臼井幸彦（うすい ゆきひこ）
学位(専攻分野)　博　士（工　学）
学位記番号　論工博第3606号
学位授与の日付　平成13年9月25日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　鉄道駅の機能複合化に関する都市論的研究

論文調査委員　（主査）教授 中村良夫　教授 飯田恭敬　教授 岡崎甚幸

論文内容の要旨

近年，鉄道拠点駅では商業機能や宿泊機能等が複合化し，それに伴い駅の規模も著しく拡大するものが多く，既成の都市構造にも様々な影響を与えている。本論文は，近代日本の都市造営における鉄道駅の重要性に着目し，鉄道駅の型式と立地の変遷プロセスを実証的に分析するとともに，駅の機能複合化を都市論的に研究したものであり，8章からなっている。

第1章は序論であり，本研究の背景と既往研究，研究の目的，研究の構成と特色，研究の対象範囲を述べ，本論で用いる用語を定義している。

第2章では，西欧主要都市の中央駅など，特にパリの6終端駅と，日本の県庁所在都市の中心駅，金沢駅，熊本駅など10駅における，鉄道創業時からの駅成立の歴史的経緯を分析している。その比較から，駅の形式，駅の立地，および駅の形態において認められる頭端式と通過式など，特性と相異点は，民間資本と国家資本による鉄道敷設目的の違い，既存都市構造の違い，都市における地域間の階級的対立等が要因であったと考察している。

第3章では，パリと日本の12県庁所在都市を対象に，駅開設による既成市街地中心部の変容過程を比較し，パリにおいては中世の城壁とその撤去による市街地拡大が，日本の都市では駅開設後建設された駅前通りの発展が，駅と市街地中心部の関係構造を規定したことを明らかにしている。そしてパリの頭端式駅は市街地中心部の発展に併含されたが，日本の通過式駅においては駅前通りの軸状発展が市街地中心部と融合し，かつ，駅の表側と裏側の地域間に経済的，社会的格差を生んだことを明らかにしている。この様に日本の駅が成長過程の都市構造に与えた影響には通過式駅がもたらす独自なものがあり，それを「駅と都市の相関モデル」として構造化している。

第4章では，日本における鉄道創業期から今日までの，駅の機能複合化の歴史的変遷を『工部省記録』（東日本旅客鉄道（株）所蔵）等の鉄道関係資料によって分析し，都市計画及び資本参加方式など制度上の変化のもたらす影響を明らかにしている。

第5章では，1880年（M13）開業の札幌駅を対象として，機能複合化の変遷と複合化促進要因を明らかにし，第3章の「駅と都市の相関モデル」の具体例として検証している。さらに，機能複合化がもたらす賑わい性，利便性，快適性，コミュニティ性等を「駅の都市性」として，経済学で通常，不動産価値評価のために用いられる効用比の用途別評価の考えに基づいた「複合比」を提案することで多機能な「駅の都市性」の定量化を試みている。そして札幌駅の複合比を試算し，民衆駅化，および鉄道高架化後の跡地開発が都市性の向上に効果的であったと評価している。

第6章では，社会の「公的領域」に関する先行研究の成果を踏まえ，「駅の公共概念」を，共通性，公開性，距離感の3つの「公共空間特性」により説明することを提案している。この考え方に基づき，県庁所在地駅46駅の初代駅から現行駅まで146駅を対象に，「公共空間特性」の動態的構造変化を説明している。

第7章では，駅利用者は，従来駅に備わっていた駅内部の旅客設備，案内表示，商業施設等複合化と強い関係を持つとされた利便性に「駅らしさ」を感じる傾向があることをアンケート調査結果の主成分分析等により明らかにし，機能複合化による「駅の都市性」という概念の有効性を実証する一方，「公共空間特性」との調和を損なわない計画の必要性を指摘して

いる。

第８章は結論であり，本論文で得られた成果を要約し，駅開発における都市計画と鉄道経営のあり方，駅施設計画と公共性のあり方等，今後の課題について述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，近代日本の都市造営における鉄道駅の重要性に着目し，鉄道駅の型式と立地の変遷プロセスを実証的に分析するとともに，駅機能複合化の都市論的評価を目標に研究した成果をまとめたものであり，得られた成果は次のとおりである。

1．鉄道駅の都市史的分析の結果，西欧都市に多い頭端式と日本に卓越する通過式の二形式が，都市の求心構造の強弱，全国鉄道網形成の考え方の二点によって発生論的に説明できるとし，さらに，両型式の都市景観的象徴性の比較分析により，その都市史的意義を明らかにした。

2．主要な県庁都市の鉄道駅についてその駅舎型式，複合利用，都市立地等の総覧的史料分析の上に，西欧の鉄道駅立地との類型的比較分析を行い，日本の地方都市の史的展開において鉄道駅-都心軸が決定的な役割を果たしたことを説明する「駅と都市の相関モデル」を構築した。

3．鉄道駅の機能複合化の史的変遷を実証分析し，複合化の必然性と構造に関する都市論的枠組みを示した。それを踏まえて，鉄道駅の都市性を表す定量的機能複合化指数を導入し，これを以て札幌駅の都市性の経年変動の特性を開発方式との関連において説明した。

4．県庁所在都市の鉄道駅の世代変遷を悉皆的に整理・類型化した上，鉄道駅の機能複合化がもたらす公共性の構造変化を，駅の「公開性」「共通性」「距離感」の三点から評価する方法を提案するとともに，複合化概念の都市認知論的有効性を示した。

以上を要するに，本論文は鉄道駅の型式と立地ならびに機能複合化について，その都市論的構造を明らかにし，計画への系統的指針を与えたものであり，学術上，実際上寄与するところが少なくない。よって，本論文は博士（工学）の学術論文として価値あるものと認める。また，平成13年６月28日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。